【中国新聞　10/28　（15面）】

読む・知る・学ぶ

Newspaper In Education

動物へ配慮 模型で実習

大学力

山口大の共同獣医学部は、研究対象の動物にできるだけ苦痛を与えない「動物福祉」に力を入れる。実物とほぼ同じサイズの模型を用いた臨床技能実習を積極的に導入。2021年度までに実習の大半を模型に切り替え、生きた動物を使わない方針という。

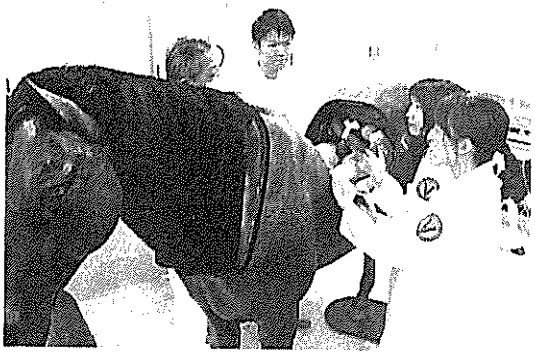
学生が24時間、自由に技能の習得などに使える施設「クリニカル・スキルスラボ」。犬の臓器を診るエコーや気管挿管の装置、馬の胎児模型など14種類の動物シミュレーターがそろう。実物に近い精巧な模型。3月にクラウドファンディングで総額473万円を集め追加購入した。

山口大
共同獣医学部

例えば、馬は腹部に痛みを感じる病気にかかりやすいため直腸検査が欠かせない。ただ1学年30人全員が生体を使った実習をすれば、動物の負担は大きく時間もかかる。

佐々木直樹教授(51)＝大動物臨床学＝から直腸検査の指導を受ける5年三宅里花さん(23)は「実際の動物を触る前にどんな形なのかが分かるので不安が減る」。佐々木教授も「模型であれば繰り返し触ることができ、技能向上にもつながる」と効果を話す。

馬の等身大の模型を使って佐々木教授（左端）から指導を受ける学生たち



動物への投薬や手術を学ぶために生体実習は欠かせないが、国際的には動物にストレスや苦痛を与える研究は信頼性を欠くとして「動物福祉」への配慮が進む。同大でも7月、米国の国際実験動物管理公認協会（AAALAC）の認証を北海道大、鹿児島大に次いで取得。今後は欧州獣医学教育機関協会（EAEVE）の認証取得を目指す。

動物への愛着も深めようと、本年度から1年生は飼育実習を必修にした。佐藤晃一学部長は「動物を飼ったり触ったりしたことがないという新入生が増えている」と話す。将来は気管挿管を仮想現実（VR）で実習できるシミュレーター開発も構想する。佐藤学部長は「獣医師だからこそ動物の痛みを誰よりも分からなくてはいけない。国際水準の教育へ充実させたい」と意気込む。

（橋原芽生）